

## 野村篁園を中心とした填詞活動について

——天保期の詞人たち——

陳 竺 慧

Abstract

## はじめに

「填詞」とは、すなわち一定の曲調に詞を填めることである。中国語では「詞を作る」意味で動詞として使われることが一般的であるが、日本語では文体の名称として使われることが多い。それは「詩」と「詞」とは日本語では同じ発音になるため、混同を避ける意識が働くからであろう。「填詞」は「長短句」または「詩餘」「楽府」などと呼ばれ、「詞牌」という予め決まった楽譜と文字形式に応じて言葉を選び、規則正しく填めていくことで成立する文体である。七言絶句や五言律詩など、厳しい平仄や押韻の規則がある近体詩と比べても填詞は遥かに複雑な作業であり、古くから漢詩が盛んに作られる日本でもなかなかこの文体に挑む作者は見受けられない。神田喜一郎『日本における中国文学—日本填詞史話<sup>①</sup>』は、日本の填詞作家を丹念に拾い上げた先駆的な労作である。その中で取り上げられる作家は平安時代から安土桃山時代まではわずか四人、漢学が成熟し多くの漢詩人が輩出した江戸時代でも四十四人の作品が残されているだけである。しかも、その多くは数首のみで、試作とも呼ぶべきような作品である。「填詞」がいかに日本人にとって馴染みの薄い文体であったことが推し量れるであろう。そのためか、日本の詞はほとんど注目を受けず、その作者たちも、「詩人」として論じられることがあっても、「詞人」として論じられることはなかった。

しかし、一過性の試作に止まらず、本格的に填詞に取り組む作者たちも少数ではあるが確かにいた。その中の一人が野村篁園（二七七五—一八四三）で

ある<sup>③</sup>。篁園は生涯に百六十六首もの詞を残しており、江戸時代以前においては作品の最も多い填詞作家である。しかし、より注目すべきはこの時期、彼一人が詞を多作しただけでなく、彼の周辺の人々には詞を残した人が集中している特異な現象が存在することである。特に篁園の門人にあたる友野霞舟（二七九—一八四九）は四十一首を、日下部夢香（？—一八六三）は四十四首の詞を残した。これらの作品の副題や引、序などには互に交流の痕跡が見られ、一種の集団性が認められる。しかも、彼らの詞は数だけではなく、その質においても前代まで、あるいは同時代の文人たちと較べて突出した存在である。このことは、日本における「詞」という文学ジャンルにおける活動として、また中国古典詩文の受容と影響を考察する上で注目に値する現象である。ところが、篁園らの填詞活動については、前述した神田喜一郎の著作中にわずかに触れられるだけで、それ以降も十分な研究がなされてこなかった。そこで、本稿は篁園を中心とした填詞活動を取り上げ、その実態を解明していきたい。

## 一、填詞活動が行われた時期

篁園らの填詞を考えるにあたって、まずその活動時期を三人の作品集より考察する。

## (一) 日下部夢香の『夢香詞』

日下部夢香、名は清、通称権左衛門。夢香以外にも梅堂、梅巖、梅龕、查

軒などと号した。幕臣である。夢香の詞集『夢香詞』（国文学研究資料館所蔵）の巻首に「天保己亥春鑄」とあり、これによると『夢香詞』は天保十年（一八三九）の春に刊行されたことがわかる。また、「序文」と「小引」は前年（一八三八）の冬に書かれており、『夢香詞』の作品はすべてそれ以前のものと考えられる。その中で、制作年が明記されているのは以下の作品である。

- ▼第二首「夢江南—乙未、仲秋寄翠巖樂助教」↓天保六年（一八三五）
- ▼第五首「梅花令—丙申、秋抄。霽莊書屋看梅花歸後、香色猶依稀於夢寐、因寫數枝、題以此調」↓天保七年（一八三六）
- ▼第九首「城頭月—戊戌、七月既望賞月抒懷」↓天保九年（一八三八）
- ▼第三十二首「念奴嬌—戊戌、二月念二。過新驛梅花、適遇原呂二生。舊雨情深、春寒可酌、因填此調。」↓天保九年（一八三八）

これらの詞題とその前後の内容から、『夢香詞』は年代順に編纂されたことがわかる。全四十四首のうち、第二首は天保六年のものと判明しており、そうすると『夢香詞』に収められている作品は天保六年から天保九年の間に制作されたものと推測される。

## (2) 野村篁園の『秋篷笛譜』

野村篁園、名は直温、字は君玉、通称兵蔵。篁園、西莊、霽莊などと号した。古賀精里に学び、昌平齋の教授を務めた。篁園には詞集『秋篷笛譜』（『篁園全集』所収、内閣文庫所蔵）があり、全百六十六首の詞を収めている。この詞集は年次順に編纂されたものであり、その大部分は一八二〇年代から一八三〇年代の作品と推測される。その根拠は、すでに前稿に記したが、その概略を述べれば、篁園の詩集『靜宜慚藁』（『篁園全集』所収、内閣文庫所蔵）に二首の詞が収められているが、その二首の詞は『秋篷笛譜』の方にも収められているため、両方を照らし合わせて時期を特定することができる。ここで注目されるのは、制作された時期が集中していることである。

『秋篷笛譜』の中に、はつきりと制作された年がわかるのは第六十五首の

「拜星月慢—乙未閏七夕同梅龕賦」と第百四十首の「慶春澤—丁酉元日」である。「乙未」は天保六年、「丁酉」は天保八年である。すなわち、全百六十六首のうち、七十五首と半数ほどの作品は一八三五年から一八三七年の元日までの二年間に制作されたことがわかる。

また、残りの作品もその季節の並び順から、大多数は近い時期に制作された可能性が大きい。具体例として、第百四十首の「慶春澤—丁酉元日」の次は「臨江山—元夕」と十五日ほどの間隔である。そのまた後には梅、春水、牡丹と春を題材にした作品が続ぎ、藤花、竹、素馨花、蟹などと初夏から秋にかけて題材が順に変わっていった後、また梅、牡丹に戻る。このようなことから、最後の第百六十六首「青玉案—暮春書感。用賀方回韻」まで、総じて二十六首の作品は一年余りの間に制作されたと考えられる。篁園は少なくとも一八三五年以降では年間二十首から三十首ほどのペースで詞を制作していたことがわかる。

以下、原本通りの順番で抜き出した篁園の詞題を見ていきたい。

- ▼第二十一首「水調歌頭—中秋梅巖・蓉湖枉過、詞以誌喜。用坡老韻」
- ▼第五十五首「洞仙歌—夏夜。次霞舟韻」
- ▼第六十五首「拜星月慢—乙未閏七夕、同梅龕賦」↓天保六年（一八三五）
- ▼第七十首「邁陂塘—查軒招同翠巖・練塘、遊墨水圓德寺。席上分韻、各填此闕。時仲商初九」
- ▼第七十一首「念奴嬌—中秋翠巖・查軒・霞舟過訪、同賦此闕」
- ▼第百四十首「慶春澤—丁酉元日」↓天保八年（一八三七）
- ▼第百四十二首「念奴嬌—春日過子縉溪莊觀梅、同查軒賦」
- ▼第百四十九首「鞞紅—牡丹盛放、同查軒・崑岡・裕堂分韻填此闕」

右に示したように、日下部夢香が篁園の詞集に初めて登場したのは第二十一首の「水調歌頭—中秋梅巖・蓉湖枉過、詞以誌喜。用坡老韻」であり、友野霞舟が最初に登場したのは第五十五首の「洞仙歌—夏夜。次霞舟韻」である。この二首の間に配置された三十四首の作品を細かく見てみるとおおよそ

季節が一巡りしていることがわかる。言い換えれば、『秋籬笛譜』において日下部夢香は友野霞舟より一年ほど早く登場したことがわかる。しかし、篁園の詩集『靜宜慚藁』の方では、友野霞舟が日下部夢香より早く登場している。篁園の『靜宜慚藁』も年次別に編纂されたものであり、友野霞舟（字は子玉）の場合は第一巻の「抄冬十五夕雪月澄鮮因欲訪子玉微恙不果詩以抒懷」という七言律詩ではすでに篁園との交流が窺える。一方、日下部夢香の方は巻四の「次梅巖韻」以降ようやく詩題に出るようになった。この二首の詩はそれぞれ文化十四年（一一八七）以前と天保五年（一一三四）以降の作品と考えられるため、少なくとも十七年以上の間がある。篁園と霞舟は古くから詩の交流があつたが、夢香との交流は詞を多く作っていた時期と重なっていることがわかる。

### （3）友野霞舟の『霞舟先生詩集附録』

友野霞舟、名は煥、字は子玉、通称雄助。崑岡、霞舟などと号した。野村篁園に学び、昌平覺の教授を務め、一時甲府徽典館の学頭に任ぜられたが、のちにふたたび昌平覺教授となる。霞舟には何通りかの詩文集が現存している。そのうち、『友野霞舟先生詩文稿』全一〇冊（都立中央図書館蔵）は自筆本であり（一部除く）、欠落が最も少ない。ただし、霞舟の全四十一首の詞の過半数の二十五首は霞舟の門人浅野梅堂（一一八一—一一八八）が校定した『霞舟先生詩集』（実践女子大学山岸文庫蔵）の第十四冊『霞舟先生詩集附録』のみに収められている。ここでは前述した二つのテキストを基準にして、以下にその内訳を挙げてみる。「庚辰」「丁亥」などは表紙や巻首によるものである。

- ◆ 『行楽集』「庚辰」 ↓ 文政三年（一一八二〇） 詞二首所収
- ◆ 『試小稿』「丁亥」 ↓ 文政十年（一一八二七） 詞二首所収
- ◆ 『幻玉集』「庚寅」 ↓ 文政十三年（一一八三〇） 詞八首所収
- ◆ 『鹿濱漁唱』「乙未」 ↓ 天保六年（一一八三五） 詩のみ
- ◆ 『霞舟吟稿拾遺』 ↓（未詳） 詞四首所収

### ◆ 『霞舟先生詩集附録詞餘』 ↓（未詳） 詞二十五首所収

友野霞舟は早くも文政三年（一一八二〇）の『行楽集』で填詞を試みたことがわかるが、その詞牌は「卜算子」「南柯子」といった小令であり、次の『試小稿』まで七年の空白がある。その『試小稿』の「歸自謠」「添字浣溪紗」、さらに次の『幻玉集』の「望江南」八首も同じく小令であり、唐から使われた詞牌ばかりで、「望江南」八首以外は『花間集』に見える作品に似た詞風となっている。

しかし、『霞舟先生詩集附録詞餘』になると、「念奴嬌」「金縷曲」（賀新郎）の別名のような長令が多きを占める上に、詞牌は宋になってからできた「雪花飛」「散餘霞」などを用いるようになり、しかも主流でないものをよく用いている。これは明らかに前の『行楽集』などに収められている作品とは違う傾向にある。

また、友野霞舟の詩文集は巻首に年月を明記しており、年次別に編纂されている。『霞舟先生詩集附録詞餘』は巻首に年月を記していないが、詞題を見る限り年次順になっていると思われる。第二首の「月華清——八月十三夜、梅龕、招同篁園先生・翠巖・裕堂・柳溪賞月」以降、霞舟の篁園と夢香らの交流が散見される。例えば、第三首の「十五月夜、瀛玉館（篁園宅）賞月、梅龕・翠巖同賦。調寄念奴嬌」は篁園の第七十一首「念奴嬌——中秋翠巖・查軒・霞舟過訪、同賦此闕」、夢香の第三十六首「念奴嬌——中秋同翠巖・霞舟・西莊賞月」と同時に作られた作品と考えられる（後述）。そうすると、霞舟のこの作品も天保六年（一一八三五）から天保八年（一一八三七）前後に制作されたと推測される。ここで霞舟の天保六年の詩集『鹿濱漁唱』のタイトルが注目される。この詩集には詞が収められていないが、篁園の『扁舟尋舊約——梅巖、築舍鹿濱、邀予同賦、分得隨字』という詞題に書かれている通り、鹿濱は日下部夢香の別宅を指しており、何度も篁園、霞舟と夢香自身の詞集に登場している。霞舟も篁園と同じく、詞を多く作っていた時期は夢香との交流が頻繁な時期とほぼ重なっていることがわかる。実は初期の『行楽集』「乙卯」（一一八一九）にも「日下部氏園亭賞梅分韻」という詩が収められているため、こ



の日下部氏が日下部夢香と同一人物だとすれば（その蓋然性は高い）、友野霞舟が詞を作り始めたきっかけが日下部夢香との交遊にある可能性は高い。

以上、三人の作品の制作された時期を総合的に考えると、文政年間（一八二〇年代）から詞の制作が見られるようになったものの、頻繁に唱和したのは天保年間（一八三〇年代）と推測される。とくに天保六年（一八三五）から天保九年（一八三八）の間には、年間二十首から三十首以上の頻度で詞を制作している。これほど集中的に詞を制作したとすれば、填詞が決して一般的ではない江戸時代においても、三人はかなり意識的に填詞に関わる活動を行っていたといえるであろう。

## 二、填詞活動の参加者について

篁園らの詞集を繙いていくと、詞題などから填詞には参加したものの、現在作品が伝わっていない人たちが存在していることがわかる。前述した三人の詞集のうち、詞題に「同賦」「分韻」などのキーワードがある作品によって、共に填詞を制作したとわかる人物と登場した詞題とを整理すると、次のようになる。

- ◇設楽翠巖（生没年不詳）名は能潜、字は徳光、通称八三郎。翠巖と号した。
- 昌平饗の教官、のちに代官、勘定吟味役、先手鉄砲頭などを務めた。
- ▼邁陂塘―査軒招同翠巖・練塘遊墨水圓徳寺。席上分韻、各填此関。時仲商初九也（篁園）
- ▼念奴嬌―中秋翠巖・査軒・霞舟過訪、同賦此関（篁園）
- ▼金人捧露盤―福壽草。同翠巖賦（篁園）
- ▼夢江南―乙未仲秋寄翠巖樂助教（夢香）
- ▼念奴嬌―中秋同翠巖・霞舟・西莊賞月（夢香）
- ▼月華清―八月十三夜、梅龕招同篁園先生・翠巖・裕堂・柳溪賞月（霞舟）
- ▼念奴嬌―十五夜。瀛玉館賞月。梅龕・翠巖同賦。調寄念奴嬌（霞舟）

◇山内碧筠（一七八九―一八五三）名は正誼、字は子直、通称尚介。碧筠と号した。大田南畝の門人山内穆亭の長子。

▼一萼紅―盆中牡丹著花、邀碧筠同賦（篁園）

◇木村裕堂（一八〇二―一八五九）名は定蔚、字は豹文、通称金平。裕堂と号した。木村定良の子であり、昌平饗の教授、甲府徴典館学頭などを務めた。友野霞舟の娘の婿。

▼鞞紅―牡丹盛放、同査軒・崑岡・裕堂分韻填此関（篁園）

▼月華清―八月十三夜、梅龕招同篁園先生・翠巖・裕堂・柳溪賞月（霞舟）

◇石川練塘（生没年不詳）名は澄、字微、通称銃之助、練塘と号した。

▼邁陂塘―査軒招同翠巖・練塘遊墨水圓徳寺。席上分韻各填此関。時仲商初九也（篁園）

▼念奴嬌―十七夜。練塘袖詩見過。三填前調。（霞舟）

これらの顔ぶれを見ると、篁園らの填詞活動と関わっているのは主に昌平饗の関係者であることがわかる。すなわち、篁園および霞舟の門人であり、さらにいえば、いわゆる「官学派」の詩人たちによって構成されているということである。

「官学派」は寛政異学の禁以降、古賀精里（二七五〇―一八一七）をはじめ、昌平饗の儒者、教官、学生を中心とした一派であるとされる。<sup>12)</sup>古賀精里が主導している詩社は牛門社といい、詩会は主に精里の賜邸復原楼で行われた。精里死後は、牛門社はおおむね精里の三男古賀侗庵（二七八八―一八四七）の如蘭社と野村篁園の龍隱庵での詩会に分かれる。

『桃野随筆』<sup>13)</sup>には次のような記録がある。

此比闈詩の催ありて、穆亭、翠巖、秋浪、柳溪、秋帆、拜石、鱗川、練塘、松陰、一谷、予を合せて十一人、関口の龍隱庵に會し、社を結びて詩を作る。野村博士、玉厓老人、崑岡等はみな評者なり。追々景山、

菊圃、裕堂の輩を加へて、此社の盛なる天下第一と稱す。社名を氷雪社（氷雲社の誤記か）といふ。

野村博士は野村篁園、玉厓老人は植木玉厓（一七八一—一八三九）のことである。昌平齋に学び、狂詩作者として知られている。狂号は半可山人。崑岡は友野霞舟の別号。穆亭は山内穆亭、山内碧筠の父親である。他に設楽翠巖、石川練塘、木村裕堂の名前も挙げられている。それ以外のメンバーも昌平齋の関係者によつて構成される。また、これを書き留めた鈴木桃野（一八〇〇—一八五二）<sup>16</sup>は篁園らの詞集にこそ登場していないが、彼の随筆『無可有郷』に「日下部梅堂に会して史を讀。（梅堂は番町一名麴町三丁目なり。雨の夜も四ッ時まで会談行たり）」とあり、夢香との繋がりのあつたことがわかる。さらに中根香亭（一八三九—一九一三）の『香亭遺文』<sup>17</sup>には鈴木桃野の詞に関する記録があり、詞一首が収められていることから、桃野も篁園らの填詞活動に関わつた可能性が高い。友野霞舟が一八三六年に書いた五言律詩「贈詩友七首」の中に、設楽翠巖、日下部夢香、木村裕堂にはそれぞれ一首を贈り、『昨非稿』（天保十一年）にも「次韻梅龕春初韻翠巖桃野同賦」という七言律詩がある。早く官界から退いた夢香は、昌平齋の詩会には正式には参加していないが、昌平齋の関係者たちと緊密な交友関係を持つていたことがわかる。氷雲社が結成されたのは精里の死後から五年ほど経つた文政五年（二八二二）十二月二十六日のことである。<sup>18</sup>この時の篁園はすでに儒者見習となり、詩会の指導者であることが明らかである。そうとすれば、時期を考えると填詞においても、篁園は指導者の立場にいると考えられる。霞舟は篁園に入門しており、篁園に「先生」または「博士」とつけて呼称することが多い。『夢香詞』の小引においても、篁園は夢香を門人として扱ふような書き方をしていゝ。しかし、桃野の『無可有郷』に「梅堂日下部氏詞学をとなへ、一時を風化せんとす」とあり、また夢香は篁園や霞舟と違い、詞集を写本のみではなく、自ら出版している。<sup>19</sup>夢香の填詞に対する情熱は推し量れるであろう。第一節で述べたように、友野霞舟と日下部夢香の唱和が最も頻繁になるのは、夢香の別宅である「鹿濱」をタイトルとした『鹿濱漁唱』（天保六年）前

後である。篁園の詩集に夢香の名前が見えるようになったのも天保五年以降の作品である。

以上をまとめると、篁園らが填詞を制作しはじめる前に、篁園を指導者とする作詩グループはすでに昌平齋の関係者によつて出来上がつていた。そこに填詞に最も熱心だつた日下部夢香が加わり、填詞趣味が昌平齋を中心に「一時風化せんとす」となつたのではないかと考えられる。<sup>20</sup>

加えて興味深いことに、梁川星巖（一七八九—一八五八）が江戸に玉池吟社を開いていた頃（天保五年以降）、夢香がよくそこに通つていたという記録がある。

当時日下部夢香なる者あり。幕下の士なり。常に填詞を好みて、時に翁の門に往来す。翁頗る之を許す。而れども未だ善しとは称せず。（元漢文）<sup>21</sup>

また、星巖の天保五年（一八三四）から天保十年（一八三九）の詩を収める『星巖集』丁集には「閨集」一卷がついており、その目録には、

花影庵詞 原稿小令中調長調、共八十五首、刪存未定  
玉雨山房詞 原稿小令中調長調、共九十首、刪存未定

とあり、星巖は詞を作つていたことがわかる。しかし、巻二と巻三は現存しないため、どういふ詞を作つたのかは今となっては知ることができない。ただ、これも篁園らが頻繁に填詞を制作していた時期と合致する。さらに、友野霞舟の『昨非稿』（天保十一年）には「八月十二日。梅龕邀集。聽信州佐久間象山彈琴」という七言絶句がある。「漁歌子」<sup>22</sup>一首を残している佐久間象山（一八二一—一八六四）が江戸で象山書院を開いたのは天保十年（一八三九）のことであり、場所は梁川星巖の玉池吟社の隣である。夢香邸は麴町三丁目（現千代田区）にあるため、距離は決して遠くない。象山や星巖は、日下部夢香を介して、篁園らに何らかの刺激を及ぼしていた可能性があり、実際に交

渉があつたことは確かであろう。こうしたことから見ると、決して長期間とはいえないものの、当時の江戸では現在私たちが理解してるよりも多くの文人が填詞を試みたことが推測される。

### 三、填詞活動が実際に行われる場について

第二節で言及した氷雲社は、ある意味では昌平齋の作詩教室とでもいうべき場である。現在にも友野霞舟による評と添削が付いている詩集『氷雲社中詩稿』（国立国会図書館所蔵）『芳野懷古』（九州大学付属図書館所蔵）が現存している。また、『篁園全集』の凡例に「漱芳詩社は毎月に一會、一年に十二會。其の題目は詠史詠物、見ざる所無し。先生は門弟子を教うるや周悉と謂ふべし」<sup>(22)</sup>（原漢文）とあり、昌平齋の詩会は作詩教室の性質を持つていたことが明白である。それでは、填詞活動の方はどうであつただろうか。

本節では篁園らが行つた填詞活動の場について整理し、その実態を明らかにしたい。以下は篁園らの詞集から、集まりの場で制作されたとわかる作品を列挙する。

#### ◇野村篁園（二十五首）

- ▼「折桂令—夏日永、峰、別業招集」（未詳）
- ▼「滿江紅—初夏借遊谷、墅、二首」（林述齋の庭園）
- ▼「水調歌頭—中秋梅巖・蓉湖枉過、詞以誌喜。用坡老韻」（篁園宅）
- ▼「琵琶仙—聽清川道人彈琵琶」（未詳）
- ▼「燭影搖紅—夢香書屋。詠芍藥花」（夢香宅）
- ▼「南歌子—夢香書屋雨集。分韻」（夢香宅）
- ▼「臨江仙—五日窺、綠閣招飲。分得真韻」（未詳）
- ▼「拜星月慢—乙未閏七夕。同梅龕賦」（未詳）
- ▼「邁陂塘—查軒招同翠巖・練塘遊墨、水圓德寺。席上分韻、各填此闕。時仲商初九也」（圓德寺）
- ▼「念奴嬌—中秋翠巖・查軒・霞舟過訪、同賦此闕」（篁園宅）
- ▼「扁舟尋舊約—梅巖築舍鹿濱、邀予同賦、分得隨字」（夢香宅）

#### ◇日下部夢香（四首）

- ▼「醉江月—暮秋梅龕招同子玉遊鹿濱、吟、築、各賦此解」（夢香宅）
- ▼「金人捧露盤—福壽草。同翠巖賦」（未詳）
- ▼「行香子—梅花。同諸子賦」（未詳）
- ▼「百字謠—南鄰玉蘭盛開、乞一枝以插瓶、同查軒賦」（篁園宅）
- ▼「魚游春水—暮春遊鹿濱、吟、舍。分韻」（夢香宅）
- ▼「別銀燈—雨夕查軒枉過、同填此調。剪淞亭在鹿濱、查軒遊憩處也」（篁園宅）
- ▼「霜天曉角—仲秋念八、偕梅堂重遊墨、水圓德精舍」（圓德寺）
- ▼「百字令—初冬、同查軒遊梅、林菴」（未詳）
- ▼「念奴嬌—春日過子、縹溪莊觀梅、同查軒賦」（未詳）
- ▼「一萼紅—盆中牡丹著花、邀碧筠同賦」（篁園宅）
- ▼「鞞紅—牡丹盛放、同查軒・崑岡・裕堂分韻填此闕」（篁園宅）
- ▼「定風波—秋晴分韻」（未詳）
- ▼「臨江仙—同查軒重遊樂山、堂賞梅、席上分韻、各填此闕」（未詳）
- ▼「蝶戀花—夢香書屋。詠白牡丹」（夢香宅）

#### ◇友野霞舟（十首）

- ▼「月華清—八月十三夜、梅龕招同篁園先生・翠巖・裕堂・柳溪賞月」（夢香宅か）
- ▼「念奴嬌—十五夜。瀛、玉、館、賞、月。梅龕・翠巖同賦。調寄念奴嬌」（篁園宅）
- ▼「念奴嬌—十六夜。攄、宇、林、公、邀、集、翠、蘭、軒。值雨。復填前調」（林攄宇宅）
- ▼「念奴嬌—十七夜。練塘袖詩見過。三填前調」（霞舟宅）
- ▼「醉江月—梅龕邀集鹿濱、吟、築」（夢香宅）
- ▼「百字令—攄、宇、林、公、席、上、詠、玉、蘭、花」（林攄宇宅）



▼「雪花飛—雪中訪梅龕」(夢香宅)

▼「靛紅—篁園博士宅、賞牡丹」(篁園宅)

▼「高陽臺—花朝前二日、夢香賞梅」(夢香宅)

▼「如夢令—丁未暮春念二日、淺君梅堂邀集月香樓、悉出所藏書畫珍玩相與賞鑒、乃填如夢令一闋以紀其盛。是日會者榭原月堂、戸川蓮菴、山本亟湖、市河米菴其子遂菴、田内月堂、山内香雪、鏑木雲洞、大槻盤溪、椿椿山、戸塚茗溪、併余十二人」(淺野梅堂宅)

以上の詞題を一覧すれば、まずわかるのは主な活動場所は参加者の本宅、別宅などであること。例えば日下部夢香の「夢香書屋」「鹿浜吟築」、野村篁園の「西莊」「瀛玉館」などがそれにあたる。それ以外の活動場所はおおよそ江戸近辺の庭園名所である。例えば「谷墅」「墨水圓徳寺」など。特に隅田川畔はよく篁園らの詞集に登場する。

また、集まりのきつかけとしてはいくつかのパターンがある。「招集」や「邀集」は誰かが主催者として集会を催すことである。「過訪」は誰かを訪問することである。これは中秋や七夕のような節日の時に多い。「同遊」の場合は参加者たちが共に江戸の庭園名所などに遊んで、景色を詠じるものが多い。

この中でも特に目立つのは日下部夢香主催の集まりの頻度の高さである。ここに挙げた篁園の詞題全二十五首のうち夢香は十七首に関わっている。友野霞舟の十首のうち五首の詞題には名前が乗っている。夢香がいかに積極的に自から雅集を催したかがわかり、その填詞に対する力の入れようが伺える。

#### 四、填詞活動の実態

##### (一) 同日の作からみる篁園らの填詞活動

篁園らが集まりの場において、実際にどのような作品を作っていたのかについて、幾つかの例を挙げて見ておきたい。

▼念奴嬌—中秋翠巖查軒霞舟過訪、同賦此闋。(野村篁園)  
一年佳候、細商量無似、平分秋色。每恨頑陰、多障蔽、幾度能逢晴夕。笑口須開、愁眉莫聚、斯會誠為適。冰天不夜、四鄰絲管喧沸。

一年の佳候、細かに商量すれば似る無し、秋色平分す。毎に恨む頑陰に障蔽多きを、幾度か能く晴夕に逢わん。笑口は須らく開くべし、愁眉を聚むること莫かれ、斯の會誠に適を為す。氷天も夜にあらず、四鄰の絲管喧沸す。

追念昨歲南樓、銀燈剪雨、強譜孀娥曲。賴有重遊債舊債、把盞苦酬蟾魄。雁翅風高、葦鬚露濕、身墮清涼國。豪機頓發、靠欄吹徹瑤笛。

追念す昨歲の南樓、銀燈雨を剪る、強いて孀娥の曲を譜す。賴いに重遊有りて舊債を償う、盞を把つて苦りに蟾魄に酬ゆ。雁翅に風高く、葦鬚露に濕い、身は墮つ清涼の國。豪機頓に發し、欄に靠りて瑤笛を吹き徹す。

▼念奴嬌—中秋同翠巖霞舟西莊賞月。(日下部夢香)

九秋已半、正林陰彫翠、露痕凝白。拉此西園詩酒伴、買醉同酬佳節。爭奈癡雲、妬茲高賞、不肯現冰質。愁腸將斷、倩誰還弄橫玉。

九秋已に半ばなり、正に林陰翠を彫し、露痕白きを凝らす。此の西園に詩酒の伴を拉いて、酔を買い同に佳節に酬るん。爭奈せん癡雲は、茲の高賞を妬み、氷質を現すを肯んぜず。愁腸將に斷たんとし、誰を倩うて還た横玉を弄せん。

倦倚晒錦廊邊、幽渠一派、看碧蟾新浴。冷漢無塵開寶鏡、粧了滿庭風色。早雁沉江、宿鴉翻樹、捲起紋簾額。晶明如畫。儘他涼氣吹燭。

倦みて倚る晒錦廊の邊に、幽渠一派、碧蟾の新浴を見る。冷漢塵無く寶鏡を開き、滿庭の風色を粧了す。早雁江に沈み、宿鴉樹に翻る、捲き起す紋簾の額を。晶明たること畫の如し。儘他あれ涼氣の燭を吹くを。

▼念奴嬌—十五夜。瀛玉館賞月。梅龕翠巖同賦。調寄念奴嬌。(友野霞舟)  
昨來風雨、冷颼颼埋卻、良宵明月。梧顛蕉喧聲不斷、獨倚欄干愁絕。幸這天心、俯從人願。頓使氛埃豁。難拋美景、況逢佳宴方設。

昨來の風雨、冷颼颼として埋卻す、良宵明月を。梧は顛え蕉は喧として聲斷えず、獨り欄干に倚りて愁絶す。幸いに這の天心、人の願いに俯從す。頓に氛埃をして豁けしむ。抛り難き美景、況んや佳宴の方に設けらるるに逢うをや。

俄頃鏡影飛空、金波溢池、亂颼蘆花雪。乍怪吳剛揮玉斧、塵界化成仙闕。露滴殘蛩、雲迷過雁、總覺詩情切。清光雖好、恐他偏照華髮。

俄頃鏡影空を飛び、金波池に溢ち、亂れ颼ぐ蘆花の雪。乍ち怪しむ吳剛は玉斧を揮い、塵界化して仙闕と成る。露は殘蛩に滴り、雲は過雁を迷わす、總て覺ゆ詩情の切なるを。清光好しと雖も、他の偏に華髮を照らすことを恐る。

この三首とも中秋の作であり、詞題ではお互いの号をあげている。翠巖の作品は現存していないが、これは四人が篁園の瀛玉館に集まり、同時に填詞した作品と思われる。内容を見てみると、「中秋節は一年のうちに月が一番綺麗に見える日であるはずが、あいにくの天気で月が雲に隠れてしまった」から、「しばらくして、空が晴れてようやく美しい月光と共に涼しい秋の夜を楽しむことができた」という内容の構成が共通している。傍点をつけた詞句を見れば、三首ともこのことに対する描写があり、同じ日であることがわかる。

この中でも特に注目に値するのは、夢香の「拉此西園詩酒伴、買醉同酬佳節」という句である。西園は三国魏の鄴都にあった庭園であり、魏の文帝(曹丕)はよく月夜にそこで詩人才子と共に遊ぶ。ここでは自分たちの清遊を文帝のそれに比して詩友たちを誘い、宴会を開き、満足するまで飲み、共にこの素晴らしい節日を祝おうという意味である。

これを見ると、填詞は宴会の餘興という形をとって行われていたようであるが、実際には填詞を作ることを予定して集まったのであろう。他にも同日に作られたと思われる作品が数首ある。例えば、次のようなものである。

▼「臨江仙—同查軒重過樂山堂賞梅、席上分韻、各填此闕」(野村篁園)

▼「臨江仙—樂山堂賞梅」(日下部夢香)

▼「別銀燈—雨夕查軒枉過、同填此調。剪淞亭在鹿濱、查軒遊憩處也」(野村篁園)

▼「別銀燈—首夏雨訪瀛玉館」(日下部夢香)

▼「醉江月—暮秋梅龕招同子玉遊鹿濱吟築、各賦此解」(野村篁園)

▼「醉江月—梅龕邀集鹿濱吟築」(友野霞舟)

これらは、いずれもお互い同じ詞牌を用いている。また、分韻の作も多く見られることによって、填詞は篁園らにとつて、詩を作るのと同じように、遊戯性のある、餘興にふさわしい活動にまでなっていたのではないかとある。

## (2) 同題の作

宴会の席上や共に出遊する時、篁園らはよく同じ詞牌を用いて填詞したことがわかる。しかし、それ以外にもわざと同じ詞牌を用いて填詞することがある。

篁園、夢香、霞舟三人の作品において詠物は非常に大きな比率を占めるが、その詞題を見ていくと、三人には同題の作品が幾首もあり、しかもそれらは同じ詞牌によって制作されている。

本節はその中から、友野霞舟と野村篁園の春水を詠じた「南浦」について見ていきたい。

音楽がすでに失われていた詞を制作するにあたって、必ず前人の作品または詞譜を参照する必要がある。篁園と霞舟は「南浦」という詞牌に挑むため、どの作品を手本にしたのだろうか。昌平饗所蔵の書物を記録した『昌平志』の巻四「経籍誌」に「詞綜十二本」と「詞律十本」とある。『詞律』に収められている「南浦」は「春水」という詞題ではない。そうすると、篁園と霞舟は『詞綜』に収められている張炎と王沂孫の「南浦」を参照したのであろう。特に友野霞舟の作品を張炎と王沂孫の「南浦」と並べて見てみると、



霞舟の作品は明記していないが、張炎の南浦に次韻していることが分かる。以下韻字に黒丸「●」を標記する。

▼南浦—春水（友野霞舟）

新水綠溶溶，織羅紋，恰是瀟湘清曉。心緒亂如烟，東風裏，離恨滿腔難掃。鷗波漲處，君山一點螺鬟小。借問王孫歸尚未，幾度喚愁春草。

新水綠溶溶として、羅紋を織る、恰も是れ瀟湘の清曉なり。心緒亂るること烟の如し、東風の裏、離恨は滿腔にして掃ひ難し。鷗波漲る處、君山一點螺鬟小さし。借問す王孫歸るや尚ほ未だしやと、幾度か愁を春草に喚ばん。

染成千里藍光，看碧暈無邊，青痕未了。沿岸杏花村，高簾影，賒醉何誰尋到。天涯窄渺。斜陽渡口遊踪悄。都為多情人易老，唯願再生情少。

千里の藍光染め成し、碧暈の邊無きを見る、青痕未だ了らず。沿岸の杏花村、簾影高く、醉を賒りて何誰か尋ねて到らん。天涯は窄渺たり、斜陽の渡口に遊踪悄たり。都て多情の為に人は老い易し、唯だ願ひ再び生れなば情少なからんを。

▼南浦—春水（宋・張炎）

波暖綠粼粼，燕飛來，好是蘇堤才曉。魚沒浪痕圓，流紅去，翻笑東風難掃。荒橋斷浦，柳陰撐出扁舟小。回首池塘青欲遍，絕似夢中芳草。

波暖く緑にして粼粼たり、燕飛び來たり、好し是れ蘇堤才かに曉なり。魚沒して浪痕圓かなり、紅を流し去り、翻りて笑う東風の掃き難きを。荒橋斷浦、柳陰撐え出だす扁舟の小さを。首を回せば池塘の青遍からんと欲す、絶だ似たり夢中の芳草に。

和雲流出空山，甚年年淨洗，花香不了。新淥乍生時，孤村路，猶憶那回曾到。餘情渺渺。茂林鶻詠如今悄。前度劉郎歸去後，溪上碧桃多少。

雲と和に空山より流れ出で、甚ぞ年年として淨洗せる、花香了らず。新淥乍ち生ずる時に、孤村の路、猶ほ憶ゆ那回曾て到りしを。餘情渺渺たり。茂林の鶻詠如今悄たり。前度の劉郎歸り去りし後、溪上の碧桃多少なりや。

二つの作品とも春の朝方、緑の水面が輝く情景から始まり、風に吹かれても消えない気持ち、あるいは古典作品の中で離愁の象徴として使われる春草

野村篁園を中心とした填詞活動について

など、春水とその周辺の「景」を描写しながら女性の離愁という「情」を表現する展開は一致している。韻字が同じであるためか、細かい違いはあるが、友野霞舟がこの作品において取り扱っているモチーフは張炎の作品と多く重複していることが明らかである。

次は篁園の作品を見てみる。

▼南浦—春水（野村篁園）

巴蜀雪全融，望銀塘，萬頃鱗紋初聚。煙柳淡還濃，紫鷗夢、綠出麴塵千縷。吳淞半幅，未勝真景饒風趣。落鏡螺鬟青不定，紫鷗亂吹輕絮。

巴蜀の雪全く融け、銀塘を望めば、萬頃の鱗紋初めて聚まる。煙柳淡くして還た濃し、鷗夢を縈りて、麴塵千縷を繰り出す。吳淞の半幅も未だ真景の風趣の饒かなるに勝らず。落鏡の螺鬟青定まらず、紫鷗輕絮を亂れ吹く。

隙光荏苒如梭，歎湔裙節過，流觴期誤。桃岸錦模糊，斜陽外，一片漁舟橫渡。牽芳客去。晚霞攔斷銷魂路。休怪漲痕添數尺，別淚灑殘南浦。

隙光荏苒として梭の如し、歎く湔裙の節の過ぎ、流觴の期誤ることを。桃岸錦模糊たり、斜陽の外、一片の漁舟横渡す。芳を牽る客去る。晚霞攔斷す銷魂の路。怪む休れ漲痕添うること數尺なるを、別淚南浦に灑殘す。

篁園は張炎または王沂孫の「南浦」に次韻していないが、填詞にあたっては春水に関わる詩語または典故の選択において、王沂孫の作品の影響が色濃い。「銀塘」「麴塵」「湔裙」などは王沂孫の「南浦」にも使用されている詩語であり、他に水面を描写した「萬頃鱗紋初聚」（萬頃の鱗紋初めて聚まる）は王沂孫の「參差谷紋初遍」（參差として谷紋初めて遍し）を踏襲したと思われる。「巴蜀雪全融」（巴蜀の雪全て融け）の一句は王沂孫「南浦前題」の「應是雪初消、巴山路」（應に是れ雪初めて消す、巴山路）を想起させる。「一片漁舟橫渡。牽芳客去。晚霞攔斷銷魂路。」（一片の漁舟横渡す。芳を牽る客去る。晚霞攔斷す銷魂の路。）は同じく王沂孫「南浦」の「滄浪一舸、斷魂重唱蘋花怨」（滄浪に一舸、斷魂重唱て唱う蘋花の怨を）と似通っている。

篁園の詞に散りばめた詩語と叙景から離愁に入る時の展開など、その描かれた情景を見ると篁園は細心に王沂孫の詞の情景をなぞっている。他に霞舟

も王沂孫「南浦<sup>前題</sup>」の「藍光千頃」を「千里藍光」にして取り入れるなど、二人とも学習した痕跡が見える。

さらに、篁園と夢香も二人とも「永遇樂—秋蟬」「惜秋華—牽牛華」「一萼紅—紅梅」と題した作品がある。昌平覺の詩会と較べてより人数が少なく、より私的な集まりではあるが、篁園は夢香、霞舟らと課題を設けて填詞教室のような集會を頻繁に開いていたようである。篁園は他に「燭影搖紅—夢香書屋。詠芍藥花」「蝶戀花—夢香書屋。詠白牡丹」などの作品があり、その詞題から推測するには、夢香の同題作品は現存していないが、夢香も同じ題材を詠じたであろう。そうであれば、篁園らの詞集に詠物が多く占めるのもうなずけることであろう。

## 終わりに

填詞は昌平覺を中心とする局地的な流行を見せた。そこに野村篁園や友野霞舟らの「詩社」による縦と横の繋がりによって成り立った「詞社」のような集団がある。定期的な集會があり、共に切磋琢磨の仲間がいて、作品を評価する先生がいる。彼らは昌平覺の教授、幕臣およびその門人である。篁園を指導者として、填詞集団として活動していたと言つてよいであろう。彼らの活動時期は決して長くはなかったが、日本の填詞の歴史を考えると、極めて特筆すべきことであると考えられる。

篁園らが特に頻繁に填詞で唱和したのは一八三〇年代、天保年間のことである。田能村竹田の『填詞図譜』(二八〇六)はすでに世に出て二、三十年、明清の俗文学も注目を集めており、詞に興味を湧いた文人が増えたことは確かであろう。竹田だけではなく、頼山陽や梁川星巖などの漢詩人の作品に填詞的な表現が垣間見えることは先行研究によつて指摘されている<sup>(24)</sup>。しかし、いわゆる「官学派」の篁園らは、当時の在野の詩人たちとは没交渉に見える。その中に、両方とも繋がりがあがるのは日下部夢香という人物であるのは注目すべきことである。

しかし、夢香は早くから退隠して自由人となつたためか、その経歴は極めて不透明である。浅野梅堂の『親朋字號』<sup>(25)</sup>に「薙髮已稱釋夢香」(薙髮して已

に釋夢香と稱す)とあり、夢香は最終的に出家したらしい。天保期においての填詞活動は篁園を指導格とするが、夢香の働きかけも無視できないものがあつたと思われる。

## 注

- (1) 二女社、上下二冊となっており、上冊は一九六五年、下冊一九六七年、のちに『神田喜一郎全集』巻六—巻七(同朋舎、一九八五—一九八六)に収録。
- (2) 「詞」という文体を意識して制作したかどうかという点において考えると、それらの作例は雑言体として作られた楽府詩「漁歌」と思われる。
- (3) 詳細は拙論の「野村篁園の詞集『秋篷笛譜』について」(『中国文学研究』第四十期、二〇一五)を参照されたい。
- (4) 設楽翠巖作。最後に「天保戊戌冬至日」とある。戊戌は一八三八年。
- (5) 野村篁園作。最後に「著雍闍茂之冬」とある。著雍闍茂は戊戌年のこと。
- (6) 完全な時系列、編年体ではないと思われる。同じ詞牌で制作された作品はまとめて配置されているため、詞牌と詞牌の間および同じ詞牌の作品の間では制作年次順の配置になっているが、その他の場合には制作年次が少し前後する現象が見受けられる。しかし、内容を鑑みるとこれらは全部同じ時期(一八三五—一八三九)の作品と見て良いであろう。
- (7) 注(3)参照。
- (8) 「悼空雲翁三十韻」(一八一二)の後、「精里先生挽詩六十八韻」(一八一七)の前に配置されているため、その間の作品と推測される。
- (9) 「盂夏龜子含招同諸子集歡樂園分韻二首」(一八三四)の後に配置されているため、それ以降の作品と推測される。
- (10) それらの内容上の相互関係については揖斐高の「友野霞舟——「官学派詩人」の詩について」(『江戸詩歌論』、汲古書院、一九九八)に詳しい。
- (11) 「霞舟吟稿拾遺」は霞舟の息子鑑吉が遺稿を集めて編纂したものであり、四首の詞が収められている。制作年については未詳であるが、詞牌は「南歌子」「荷葉杯」「醉落魄」などの唐代からの小令が多いため、『霞舟先生詩集附録』<sup>(詞餘)</sup>とは違う時期の作品であろう。
- (12) 「官学派」という名称の初出は森銃三「近世の漢学者とその漢詩漢文」(『森銃三著作集』第十二巻所収、中央公論社、一九七二)であるが、ここでの定義は坂口筑母の『昌平校談叢』「自序」(坂口筑母、一九九九)に従う。
- (13) 森銃三編『隨筆百花苑』巻七所収、中央公論社、一九八〇。
- (14) 詳細については森潤三郎の「鈴木桃野とその親戚および師友」上(『史学』第十巻第三号、慶應義塾大学、一九三二)を参照。
- (15) 名は成慶、字は一足、通称孫兵衛。詩澤山人、醉桃子、桃野などと号した。幕府

の書物奉行鈴木白藤の子。昌平齋の教授を務めた。随筆を多く残しており、著作に

『酔桃庵雜筆』『無可有郷』『反古のうらがき』など。

(16) 森銑三編『随筆百花苑』巻七所収、中央公論社、一九八〇。

(17) 『香亭遺文』、金港堂書籍、一九一六。

(18) 鈴木貞夫「権楽園―松岡藩下戸塚村抱屋敷(5)」、『しんじゅく』一六三号、二〇一三。

(19) 巻首に「剪淞樓藏板」とあり、篁園の詞集に「剪淞亭在鹿濱、查軒遊憩處也」とあるため、『夢香詞』は夢香自ら上梓したものであるとわかる。

(20) 神田喜一郎の「昌平齋を中心とする填詞趣味」(『日本における中国文学―日本填詞史話 上―)所収、二玄社、一九六五)を参照。

(21) 「當時有日下部夢香者。幕下士也。常好填詞。時往來翁門。翁頗許之。而未稱善。」これは星巖の門人小野湖山(一八一四―一九一〇)による記録である。(森春濤編、『新文詩』第六七号、一八八〇)

(22) 「漱芳詩社毎月一會、一年十二會、其題目詠史詠物、無所不見、先生教門弟子可謂周悉矣。」

(23) 犬塚遜、写本、国会図書館所蔵、一八一八。

(24) 福島理子「近世文学と填詞」、『国文学…解釈と鑑賞』第七十三号、至文堂、二〇〇八年一〇月。

(25) 自筆本、慶應義塾図書館所蔵。



About the activities of making Ci 詞 around Nomura Koen 野村篁園  
—— Poets in the Tempo Era ——

ChuHui CHEN

Nomura Koen is a poet known for much “Ci” writing in the Edo period, a form that was very rare at the time. His disciples, including Tomono Kashyu and Kusakabe Mukou, also produced a lot of Ci works. One might suggest that together they form a literary group of Ci writing. This stands as an important phenomenon in the history of the reception and influence of Ci in the Edo period. This paper aims to analyze the social interactions incorporated into the process of producing the Ci works by the aforementioned authors, which were concentrated in the Tempo Era. They wrote 20-30 pieces of Ci per year in the 1830s. The participants in these literary activities are connected with Shoheiko (a school run by Edo bakufu). Many of these social/literary events were organized by KUSAKABE Mukou. They took place at Mukou’s residence or at a separate establishment and began with a party. Afterwards, participants would study and write Ci together. To write Ci, they would take the Ci of Southern Sung as a model. For example, Koen and Kashyu have a work with the same title (“Nanpu”) and theme (spring water) as Wang YiSong, a Southern Sung poet. Their activities were organized at specific times. Nomura Koen was the leader of the literary group and Kusakabe Mukou spread the Ci writing. Ci was prevalent around Shoheiko and included even more people than we expected.